くまもと文学・歴史館報

くまもと文学歴史館

第３号
目　次

巻頭言「水辺の館で学ぶ」米谷隆史（熊本県立大学教授）……１頁
企画展報告……２頁～５頁
中島国彦講演会（抄）……６頁・７頁
新収蔵資料……７頁
友の会活動報告……８頁

水辺の館で学ぶ

米谷　隆史
（熊本県立大学教授）

今更めくのですが、熊本県立図書館の西側を流れる水の流れに沿って江津湖へ向かう小道をお気に入りにしている方は随分多いようで、散歩だけではなく、春は横合いから注ぎこむ湧水沿いに菜を摘む人、釣り糸を垂れたり、ボサボサの芭蕉のかげに隠れたりする子供、鷺の狩りを眺める人や、小さな手帳を持って呻吟する人等、季節と時間を問わず思い思いの時間を過ごす姿を見かけますし、この道に寄せる思いを聞いたり読んだりすることも少なくありません。それに、以前は踏み石伝いに歩くのも難しかった図書館西南脇の庭園も、最近の調査で細川家ゆかりの別邸跡の風情を残す一角であることが明らかになって、往時のしつらえが彷彿とされるが如くに整備されました。文献調査で各地の図書館や文学館・文書館に足を運んできましたが、さしたる目的はないのに、この道の先まで行ってみようかなと文字通りにゆかしい空間をまとっているところは多くありません。

本年度秋からの後学期は、学生達と文学・歴史館を活用した調査研究プログラムを試行してみようと、早くから方針は定まっていたのですが、その題材を決めあぐねていた時、八月の収蔵品展で、展示室１の最後のところにあった井上微笑の葉書を思い出しました。毛筆ながら学部生でもある程度は解読できそうな文字だったこと、絵もあってなんとなく楽しい雰囲気があったこと、展示解説中の、夏目漱石との交渉もあった福岡県生まれの俳人で、長く球磨湯前の地で文学活動を続けた人物だったこと等。私自身は俳句について何ほども知っているわけではありませんが、近代文学を専攻する教員の協力もあるし、武蔵忌の句会を主催する文学・歴史館ゆえ基本文献は揃っているはずだから、何とかなるかもしれないと踏んで、やや見切り発車ながら、文学・歴史館が地域で果たすべき役割や展示企画実現までの各種ポイントに関する講義に、資料調査とその分析まで盛り込んだ三コマ分を、学芸員の方々に相当の無理をお願いして実施することにしました。十一月十九日土曜日、会場は壁二面のガラス越しに前述の光景が広がる展示室３です（資料閲覧時の光量は調整済）。句中の鍵になる一文字が読めなかったり、同時代の中央俳壇に関する知識を泥縄式に仕入れたりで、悪戦苦闘でしたが、学生の句の鑑賞にはハッとするような発言も折々にあって、しっかり勉強したなという気分で帰路についたことを覚えています。

漱石、子規と同年の生まれであった微笑にとっても、昨年は生誕一五〇年の記念の年でした。微笑の文業には、地域の先人による高い水準の調査と顕彰とが既に備わっていますが、生前の朝日新聞に掲載された俳句も一部であればボタン一つで探索できる時代です。文学・歴史館が所蔵する資料を含め、改めてその周辺を眺めてみる価値があると感じた次第です。

場所と収蔵品と人とに支えられて得た、最近の学習成果の披露に終始しました。協議会委員の公私混同も甚だしいという批判もありましょうが、その点はご容赦いただくほかありません。ともあれ、県民が知りたい熊本、県民が知らない熊本、よくわからないけどもう少し先まで行ってみたいと思わせる何かを、この魅力的な地を拠点に、いろいろな人たちが関わりながら発掘し、提示していく手立てを、考えていきませんか。

米谷隆史（よねや・たかし）
一九六六年、青森県生まれ。文学博士。大阪大学大学院の後、熊本県立大学へ。二〇一四年より文学部教授。くまもと文学・歴史館協議会委員。近世を中心に九州の言語・方言などを研究。論文に「笑話本の江戸語」などがある。

熊本地震から一年「震災の記憶と復興エール」

期間　平成29年４月14日～５月29日

平成二十八年四月の熊本地震から一年が経過したことを機に、熊本の震災史を振り返り、過去を知ることで、必ず未来に復興ができるという希望を県民と共有するために、企画展を開催した。この企画は、県立美術館主催の「震災と復興のメモリー@熊本」と並行開催で、県を挙げて、県民を励ますことを目的とした企画であった。当館での展示はギャラリーを含めて全館を会場とし、四部構成とした。また、図書館ギャラリーで熊本大学大学院自然科学研究科くまもと水循環・減災研究教育センターによるパネル展示「地震を科学する」も開催した。

第１章「震災と復興の記憶」

館蔵資料の相良文書や県政資料等で構成。『日本書紀』等に見える古代の地震記録や八代麦島城を崩壊させた元和五(一六一九)年地震と加藤忠広の熊本城に被害を与えた寛永二(一六二五)年地震の記録、宝永四(一七〇七)年地震で被害を受けた人吉城の復興、明治二十二(一八八九)年熊本地震当時の資料を展示することで、過去の熊本での震災と復興の歴史を紹介した。

展示室1　第１部「震災と復興の記憶」見学者

第２章「生まれいづる文学」

熊本地震で受けた衝撃を書によって表現した、書家でもある熊本大学教授・神野雄二氏の作品を展示。

震災の熊本県内外の文学者から県民を励ます色紙等によるメッセージが寄せられた。今回、作品を寄贈して下さった方々は左記のとおり。

阿木津英（歌人）、新井高子（詩人）、石牟礼道子（作家）、いとうせいこう（作家）、伊藤比呂美（詩人）、岩岡中正（俳人）、上野千鶴子（評論家）、海猫沢めろん（作家）、大塚ムネト（劇作家）、岡田利規（劇作家）、覚和歌子（作詞家）、梶尾真治（作家）、鹿子裕文（編集者）、川内倫子（写真家）、姜尚中（作家）、木村友祐（作家）、姜信子（作家）、坂口恭平（作家）、佐々木幹郎（詩人）、ジェフリー・アングルス（詩人）、下田克彦（イラストレータ）、田中庸介（詩人）、谷川俊太郎（詩人）、出久根達郎（作家）、中沢けい（作家）、中村和恵（詩人）、長谷川櫂（俳人）、平田オリザ（劇作家）、平田俊子（詩人）、平松洋子（随筆家）、藤本由香里（評論家）、ペコロス岡野（漫画家）、星野智幸（作家）、正木ゆう子（俳人）、町田康（作家）、三浦しをん（作家）、三砂ちづる（作家）、三角みづ紀（詩人）、森本梢子（漫画家）、山浦玄嗣（作家）、山折哲雄（宗教学者）、山福朱実（木版画家）、吉本由美（作家）、四元康祐（詩人）、若松英輔（評論家）、和合亮一（詩人）、渡辺京二（評論家）　〈敬称略・五十音順〉

第３章「励ますことの葉」

県に寄贈された「くまモン頑張れ絵」を一挙公開した。

地震発生後ほどなくして、被災地を励ましたいという全国の漫画家らが筆を執った。熊本県のキャラクター「くまモン」を使った自筆イラストが次々とインターネット上に公開されると、ハッシュタグ「#くまモン頑張れ絵」は大きな反響を呼んだ。

第三章「励ますことの葉」では、右の運動に賛同して描かれた数多くの「くまモン頑張れ絵」のうち、熊本県に寄贈された九十三点（うち寄せ描き二点）と、ＮＰＯ法人熊本マンガミュージアムプロジェクトに寄贈された二十八点（うち寄せ描き一点）を併せて展示、会場を彩った。

頑張れ絵は「巨人の星」で知られる県在住の漫画家川崎のぼる氏をはじめ、ビッグ錠氏（包丁人味平）、森田拳次氏（丸出だめ夫）、嶋田隆司氏（キン肉マン）などから寄せられたほか、香港やマカオで活躍する海外の漫画家・イラストレーターらの作品もあった。個性豊かなくまモンに加え、熊本城や加藤清正、宮本武蔵、熊本ラーメンに辛子レンコンなどが描かれており、どの作品も熊本への想いにあふれていた。

また、県在住の漫画家ウオズミアミ氏の協力により、被災状況をウェブコミックで連載した『ひさいめし～熊本より～』（マッグガーデン　一〇一六）の原画、打合せメモ、当時の日記を公開。原画ならではの質感や丁寧に描かれた被災後の熊本城に、多くの来館者が見入っていた。

第４章「震災万葉集」

企画展の開催に合わせ、熊本地震をきっかけに生まれた文学作品を募集したところ、県民をはじめ、全国から四千を超える作品が集まった。その全作品を展示室の壁一面に展示した。

会期中、作品をゆっくりと手に取ることができるよう、公刊を望む声が会場内外から寄せられた。その声を受けて、「震災万葉集」著作物の利用規程を定め、出版の公募を行ったところ、手を挙げてくれた出版社があり、一月末に刊行することができた（八ページに関連記事）。

関連イベント

四月十六日、「くまもと文学・歴史館友の会」による熊本地震朗読会を開催した。友の会会員による熊本地震をテーマにした詩、短歌、随筆などの文学作品を自らの声で表現した。

五月二十日に、伊藤比呂美氏による記念講演会「地震とわたし」を開催した。近著『切腹考』を題材に、伊藤氏が向き合ってきた熊本地震についての思いを語り、聴衆を励ます機会となった。

講演をする伊藤比呂美氏

四月二十三日、五月十四日、二十八日の三回に渡って、熊本大学の教授陣によるくまもと水循環・減災研究教育センター講座等の講演会を開催し、好評を博した。

少年雑誌に見る時代のヒーローたち

期間　７月20日～９月11日
会場　展示室２・３

夏休みを迎えた子供達に向けた展示会。明治から大正・昭和、そして現代へとつながる少年雑誌とその中に登場する熊本ゆかりのヒーローたちを時代に沿って展示、紹介した。第一章「末は博士か大臣か」では、立身出世がテーマであった当時のヒーローとして、木下広次、嘉納治五郎らを紹介した。第二章「憧れの偉人たち」では、歴史上の人物として宮本武蔵、天草四郎らをとりあげ、プロ野球選手の川上哲治氏を愛用バットなどの資料と共に紹介した。第三章「マンガのヒーローたち」では、少年雑誌が週刊化されていく中で、読み物中心からマンガ専門の雑誌になっていく流れを紹介した。川崎のぼる氏の作品「巨人の星」「いなかっぺ大将」の原画や、「ワンピース」の巨大バナーなどを展示した。展示室３には、熊本マンガミュージアムプロジェクトの協力を得て、一九七〇年代からの少年雑誌を約千冊、手にとって読めるように設置した。毎日、漫画を読む多くの来館者の姿が見られた。

企画展の関連行事として、合志マンガミュージアム館長の橋本博氏による「少年雑誌にみるヒーローの変遷」と題した記念講演会を開催した。また、展示担当者による講座やギャラリートークも開催した。

顕光院・益姫 江津湖を愛した奥方

期間　10月５日～11月20日
会場　展示室１

江津湖畔の熊本県立図書館・くまもと文学・歴史館が建つ敷地には、明治七年三月に竣工し、旧熊本城二ノ丸の古京町邸から引越した熊本藩十代藩主細川斉護の正室の顕光院（浅野益）が住んだ砂取細川邸があった。これに因み、顕光院に焦点を当て、江戸での結婚、出産、熊本への移住、砂取邸への転居といった人生を、個人蔵の工芸品や（公財）永青文庫の冊子史料で紹介する企画展を開催した。顕光院の遺品と伝わる貝合せや蒔絵唐櫃、娘の勇姫の嫁ぎ先である福井藩松平家と同じ葵紋が入った唐草紋蒔絵鞘付長刀一対、中島寛道の撮影による肖像写真、明治七（一八七四）年十一月に細川御内家がまとめた引越に伴う出納帳簿の砂取御隠殿御移徙明細帳等の資料を展示することで、これまで知られなかった熊本藩主の奥方の江戸末期～明治初頭の実像を紹介した。展示に関連した（公財）島田美術館との連携企画展示や水前寺江津湖公園管理事務所との共催での庭園清掃、学芸員による館内講座を催し、好評を博した。なお、顕光院没後の砂取細川邸は、西南戦争で被災した細川内膳家をはじめ、所有者が変遷したものの、庭園と敷地境の土塁が今も現存している。

「一枝の筆」に託して 徳冨蘆花生誕一五〇年

期間　平成30年1月18日～2月26日
会場　展示室1

明治元年に現水俣市に生まれた小説家・徳冨蘆花の生誕一五〇年を記念し、蘆花の生涯と作品をたどる企画展を開催した。二十歳頃から作家を志し、「何一つ出来ぬ自分にも、拙いながら、一枝の筆がある（小説『富士』）」と、明治・大正という日本の激動期を己の筆によって生き抜いた明治の文豪、徳冨蘆花。本展では五十八年十ヶ月の生涯を三期に分け、第一章「美なる日本と不如帰」、第二章「戦争と平和」、第三章「新紀元」として紹介。都立蘆花恒春園（東京都世田谷区）、徳富蘇峰記念館（神奈川県中郡二宮町）の協力を得て、全五十四点の資料により、蘆花の生涯と文学的事績を紹介した。主な展示資料には、当館が所蔵する自筆書幅や書籍の初版本、ベストセラー小説『不如帰』に関連する資料類のほか、蘆花恒春園所蔵のスケッチブックや第一高等学校講演「謀叛論」草稿、海外旅券、徳富蘇峰記念館所蔵の兄・徳富蘇峰あて書簡などがあった。

会期中には関連行事として、一月十八日に伊藤彌彦氏（同志社大学）による講演会「徳冨蘆花の告白文学―狂おしい生き直し人生―」を、二月四日に木村洋氏（熊本県立大学）による講演会「明治期の文学熱―徳富蘇峰から徳冨蘆花へ」を開催。二月十日には、展示資料の一つである明治四十四年発売の「不如帰の歌がるた」の複製を用いたカルタ大会を行った。

収蔵品展 アーカイブズシリーズ

「くまもとの記憶」をキーワードに、熊本県立図書館とくまもと文学・歴史館の収蔵品を展示室1で展示するシリーズ展。リニューアルオープンした開館記念特別展「文学と歴史でたどるくまもとの記憶」を第一回として平成二十七年度に2、平成二十八年度に3～6を実施。

●アーカイブズに見るくまもと7
「1877 西南戦争140年」
平成29年6月14日～7月24日

展示室1全面を使った初の歴史展示。西南戦争発生から百四十年が経過したことに因んだテーマ。西南戦争関係の熊本県庁文書を取りまとめた熊本県公文類纂第七類をはじめ、熊本隊を率いた池辺吉十郎の明治十年二月九日で絶筆となっている「明治十年丁丑日記」（池辺家文書43）、熊本城攻囲戦の最中の熊本協同隊士の記念写真（有馬文書205）など、西南戦争当時の貴重な史料を展示。図書館ギャラリーで玉東町・南関町・玉名市・人吉市・水俣市等が作成した西南戦争戦跡パネルやチラシを展示。

●アーカイブズに見るくまもと8
「1877 西南戦争140年②／生誕150年漱石・微笑」
平成29年8月2日～9月25日

前回に引き続き西南戦争をテーマにした展示に加え、ともに生誕一五〇年の記念の年を迎えた夏目漱石と井上微笑を紹介。夏目漱石が実際に着用していた羽織や俳句に関する資料のほか、漱石が熊本ゆかりの彌富破摩雄、池辺三山、そして井上微笑へ宛てた書簡等を展示。同年であっただけでなく、俳句を通じて交流もあった二人に注目した。図書館ギャラリーで熊本市文化振興課が作成した西南戦争パネル『雨ノチ朝』を展示。

●アーカイブズに見るくまもと9
「修復史料と新収蔵品」
平成29年12月7日～平成30年1月8日

雲林院光秀・光成父子に係る戦国期から近世初頭の剣術史料の岩尾家文書や寛永十一（一六三四）年十一月八日付け『肥後国幷豊後之内郷帳』など県立図書館が収蔵後に修復した史料とくまもと文学・歴史館が新たに収蔵した上林暁原稿「酒の戒め」、谷川雁詩稿「坑底をあるくコンミューン」、小山勝清自筆書簡等を展示。

●アーカイブズに見るくまもと10
「明治150年・耕治人没後30年」
平成30年3月15日～5月6日

明治元年から起算して満百五十年に因んで熊本藩と人吉藩での明治初年の史料のほか、没後三十年の節目を迎える八代出身の文学者・耕治人の文学資料を展示。

中島国彦講演会

演題「阿蘇を見つめる眼」

―『二百十日』と『五足の靴』をつなぐもの―

期日　平成29年11月5日
会場　熊本県立図書館大研修室

明治三十九年十月に『二百十日』が発表された翌年、明治四十年八月に「明星」の文学者たち、与謝野鉄幹・平野万里・北原白秋・吉井勇・木下杢太郎が同じように阿蘇に登っています。「五人づれ」の署名で書かれた『五足の靴』が、その記録です。この二つは自ずから趣きが違うのですが、どこでどういう接点があり、どこが質的に違うのかということを、ぜひ皆さんに理解していただけたらと思います。

『二百十日』の面白さは、圭さんと碌さんとの会話の面白さです。と同時に、「かんかん」「ぎつぎつ」「ざあざあ」というオノマトペも、会話を支えています。

圭さんが「又慷慨（かうがい）か、こんな山の中へ来て慷慨したつて始まらないさ」と言います。「慷慨」という難しい言葉が会話の中に出てくるという、この時代の言葉のあり方を考えなければなりません。その後に、「噴火口は実際猛烈なものだらうな」という「猛烈」、それから「然し僕の御蔭で天地の壮観たる阿蘇の噴火口を見る事が出来るだらう」という「壮観」など、「慷慨」「猛烈」「壮観」といった二字の熟語の概念が思い浮かびます。

明治時代の自然描写を考えるときに大事な本は、明治二十七年に出た志賀重昂の『日本風景論』です。そのキーワードが「雄大」と「奇観」という言葉です。実は、明治の自然を描いた文章の中には、景色というものを説明する場合に、よく「絶景」とか「奇観」であると決めつけてしまっています。これでは中身がうすらいでしまいます。もう一つ、日本の自然を考える参考書として、イギリスの地理学者ラバックが書いた地理書があり、明治三十八年に正岡芸陽が『風景美論』の名で訳し刊行されています。

漱石は『二百十日』でどういう言葉を使ったのでしょうか。「尤も崇高（すうかう）なる天地間の活力現象に対して、雄大の気象を養って、齷齪（あくそく）たる塵事（ぢんじ）を超越（てうゑつ）するんだ」とあります。この「崇高」という言葉は、明治三十年代に少しずつ市民権を得た大事な概念です。物事を見るときの見方のメカニズムをこういうキーワードで整理することがはやった時代がありました。『二百十日』の中では「雄大」は日常語としてありますが、「奇観」という言い方が「崇高」という言葉に置き換えられています。また、キーワードの一つとして「劔呑（けんのん）」という言葉も使っています。「思ってる丈ぢや劔呑なものだ」「なあに年が年中思つてゐりや、どうにかなるもんだ」という、やや悟ったような言い方をするときに、「劔呑」という言葉が使われています。

漱石は熊本に来てまもなく、明治二十九年十月の「龍南会雑誌」に出した「人生」という文章の最後に、「劔呑なる哉」と書いています。「人生」とは何なのか、「不測の変」はいつ起こるかわからない。そして人間の心もいつ変わるかわからない、というのです。この言葉が『二百十日』にも出てきます。確かに社会批判をして、金力・権力に対して「革命だ」などと言って愉快なのですが、一方で「劔呑」な世界もあるのだという、この二つの見方を絶えずしないと、『二百十日』を一面的に見てしまうことになりそうな気がします。『二百十日』を立体的に見るということは、この社会革命、社会批評の嵐と言われているものの裏側にあるものも、しっかりと見据えた上で考えていくことなのです。そのキーワードが熊本にやってきたばかりの漱石の「人生」の時代から、作品を書き続けるまでの二十年にわたっての体験の中で繰り返し反芻され蘇ってくる、そういうテーマでもあったと考えてみたいのです。

それに対し、『五足の靴』は、漱石のそういう思いまでは思い至らないで、ともかく『二百十日』で阿蘇が出てきたから自分たちも行ってみよう、という好奇心が第一になっています。つまり『二百十日』の意味が正しく受け止められないのです。そういうレベルでこの『五足の靴』の旅がなされていると思います。

『五足の靴』の五人づれは、最後は垂玉の湯まで行きます。「東京二六新聞」に連載された紀行文で、（十八）の「阿蘇登山」の一節を見ると、馬車に乗って、「がた、ぴしや、どしん、がら、すとん」や、「ずんずん」進ん

で、「だらだら道で」と、全く『二百十日』のオノマトペをまねしていて、それなりの面白さはあります。この文章は、自然の中に分け入ったときの記録としては、とても生き生きとした文章であることは確かです。（十九）の「噴火口」の描写にも、オノマトペは繰り返し出てきます。「底を知らぬ不可思議なる大きな壺の口からは灰色の煙がもくもくと洶（わ）き、渦（うずま）き、廻り、淀んで」云々とあって、「固（もと）より轟々（ぐわうぐわう）たる物音は分秒の休みなく喚（わめ）いてゐる」となっています。この「轟々たる」は『二百十日』の一番大事なオノマトペです。『二百十日』の最後の二行、「二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空に吐き出してゐる」つまり、『二百十日』の一番最後の行に出てくる「轟々」という言葉、これは阿蘇を考えるときに絶対に離せないオノマトペ、修飾語句です。ですから、『五足の靴』も「固より轟々たる物音は」と書かざるを得ないのです。『五足の靴』は、ただ阿蘇に登ったというだけではなく、『二百十日』の言い回しや描かれている気持ちを念頭に置きながら書かれたにもかかわらず、その一番大事なところまで追いついていないことになります。新聞連載二回分で阿蘇の登山のことを書くわけですから、仕方がないですね。

『二百十日』と『五足の靴』の大事なところを明らかにすると、両者の違いが時代の中に見えてきます。それを考えるには、明治三十年代から四十年代にかけての自然の見方、日清戦争の時期から日露戦争直後に至るまでの、自然というものがどう見られていたのかを知ることが必要です。『日本風景論』とかラバックの『風景美論』の翻訳などを横に置くことで、作品の中の自然描写を相対的に見て、大事な言葉を確認し、こういう面白い言い方をしていると具体的に明らかにすることが、何よりも大切なことではないのかと思います。当時の言語のあり方を考えながら、阿蘇がどう描かれているかを、改めて見ていきたいと思っております。

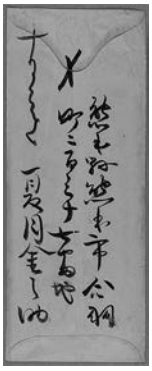
（中島国彦講演会は、夏目漱石生誕一五〇年の記念行事として開催。くまもと文学・歴史館友の会、熊本県文化協会との共催事業。）

中島国彦（なかじま・くにひこ）
一九四六年、東京生まれ。文学博士。早稲田大学名誉教授、日本近代文学館専務理事。日本近代文学専攻。著書『近代文学にみる感受性』（筑摩書房）、長島裕子との共著に『夏目漱石の手紙』（大修館書店）と『漱石の愛した絵はがき』（岩波書店）、岩波書店版『白秋全集』『荷風全集』編集委員。

新収蔵資料

○夏目漱石書簡村上霽月宛

夏目漱石没後百年・生誕百五十年の記念年にあたり、漱石の俳句や熊本にゆかりのある資料を新しく収蔵した。この資料は、夏目漱石が明治二十九年に俳句仲間である村上霽月に送った書簡三通。『漱石全集』未収録資料。漱石は明治二十九年四月に五高教師として熊本に赴任しており、三通の内二通が松山から、一通が熊本から出されている。内容はどれも俳句に関するもので、三通で合計四十六句が列記されている。松山時代から熊本時代にかけての五年間に生涯に作る俳句の約三分の二を作った漱石が、句作に熱中している姿がうかがえる。熊本から出した書簡には、「嫁」「内君」など、熊本で結婚した漱石の新婚生活に関わる俳句がみられる。また、「何にせよ東京は東京丈に随分賑は敷事と羨ましく存候」と、東京で精力的に文学活動を行う正岡子規らをうらやむ文章が見え、漱石の熊本での生活や心情が伺える。



村上霽月：明治二（一八六九）年～昭和二十一（一九四六）年現松山市生まれ。本名は半太郎。俳人・実業家。愛媛銀行頭取。二十歳頃から俳句を始め、新聞『日本』に投句する。漱石の松山時代に愚陀仏庵を訪問、子規から漱石を紹介される。松山で創刊された『ホトトギス』には創刊号から投句、六号～十一号では選者を務める。明治三十二（一八九九）年、熊本出張の際には研屋に滞在、漱石が訪れ語り合った。その後の九州旅行では内坪井の漱石宅を訪れた。交流は漱石の晩年まで続く。参考『夏目漱石周辺人物事典』

友の会事業

◆定例事業

○月案内発行　くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○文章勉強会　毎月一回開催。有志による文章講座

○歴史勉強会　毎月一回開催。文学・歴史館職員を講師とする古文書講座

◆湧水二五号発行

会員の作品を集めた文芸誌「湧水」を年一回発行。

◆今年度の主な事業

４月

○熊本地震朗読会（16日）

５月

○くまもと文学・歴史館友の会総会及び記念講演会（14日）

平成28年度の事業・会計報告、29年度の事業・予算計画、新世話人が決定。服部英雄館長による記念講演会を開催。

演題は「熊本の文化遺産」

６月

○初夏の文学・歴史探訪（４日）

阿蘇神社、国造神社、くらはら（文学資料）館、蔵原伸二郎詩碑を巡る。

９月

○連続講座　講師　服部館長（20日）

11月

○中島国彦講演会（５日）

○秋の文学・歴史散歩（16日）

天草四郎メモリアルホール～三角西港～ＪＲ三角線～宇土城址を巡る。

12月

○連続講座　講師　服部館長（13日）

２月

○「湧水」合評会

「平成28年熊本地震震災万葉集」刊行

四月に開催した企画展「震災の記憶と復興エール」に合わせて募集した、熊本地震を描いた文学作品集「震災万葉集」を刊行した。（３頁に関連記事）全国から寄せられた俳句、短歌、詩、肥後狂句など、三千点を越える作品を掲載。全国の文学者から贈られた作品も併せて掲載。（２頁に関連記事）

●掲載作品

「すさまじき音してゆがく筍の湯が
　飛び散りぬああ震度七」

「車中泊気遣いながら寝返りす八ヶ
　月の腹の娘と並びゐて」

「おにぎりの一個に並ぶ暮の春」

「地震あれど全山緑いざ生きむ」

「負けんばい角石垣に笑わるる」

「のさん元彼がいる避難先」

購入希望者は発行の花書院へ連絡を（電話０９２―５２６―０２８７）

くまもと文学・歴史館のご案内

所在地
熊本市中央区出水２丁目５番１号
（熊本県立図書館内）
電話（０９６）３８４―５０００㈹

開館時間
午前９時30分～午後５時15分

休館日
火曜日・毎月最終金曜日
年末年始・特別整理期間

入場料
無料

最寄りの交通機関
(1)市電＝「市立体育館前」下車・徒歩５分
(2)バス＝「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩５分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。

くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合せ下さい。

くまもと文学・歴史館報
第３号
平成30年３月31日発行
編集
発行　くまもと文学・歴史館
〒862-8612
熊本市中央区
出水2丁目5番1号
電話
096−384−5000㈹